

令和元年度 県立清武せいりゅう支援学校 学校評価報告書

(評価基準 A：良い B：概ねできている C：努力が必要 D：改善すべきである)

1 学校運営	関係者評価
<p>① 学校経営方針や教育目標・努力事項を踏まえた取組ができているか。</p> <p>② 諸会議が検討、確認、共通理解の場となるよう努めたか。(職員会議、運営委員会、各種委員会など)</p> <p>③ 職員間の連携を密にして組織的・協力的に取り組んだか。</p> <p>④ 災害や緊急時に対応する危機管理体制を整えているか。</p>	B
<p>(実際の取組と成果・課題)</p> <p>○職員アンケートの1-①では 89.7 %が学校経営方針や教育目標・努力事項を踏まえた取組ができていると回答。</p> <p>○各種委員会を組織して、定期的な課題検討や不定期による迅速な課題等への対応を行い、校務分掌部との役割分担による適切な業務に努めた。組織した各種委員会は「教育課程編成委員会」「教科書選定委員会」「校内就学指導委員会」「人権教育推進委員会」「修学旅行検討委員会」「スクールバス運行委員会」「学校保健委員会」「医療的ケア支援委員会」「研究推進委員会」「進路指導委員会」「ICT教育推進委員会」「給食運営委員会」である。</p> <p>○「防災対策推進委員会」は定期的に開かれる運営委員会においてその都度検討事項を協議した。運営委員会は各校務部主任および各学部主事が出席しており、避難訓練の在り方や、災害等に対する備蓄などを含めた災害対策全般の在り方を検討し、災害時に備えることができた。</p> <p>●各職員の働き方改革が進むように業務を「見える化」したり、一部の人に業務が集中しないように、学級担任と校務分掌部の業務が偏らないようにすることが課題である。また、各学部や校務部の間の連携がとれるように組織の在り方を検討していく必要がある。</p>	【自己評価】 B

2 学部関連	関係者評価
<p>① 学部経営の目標や努力事項を踏まえた実践に努めているか。</p> <p>② 学部の児童生徒の実態に応じた計画的で適切な学習活動やグループ学習、行事等を学部で取り組んでいるか。</p> <p>③ 学部会が必要な事項の検討、確認、共通理解や意見交換の場となるよう努めているか。</p> <p>④ 児童生徒の障がいの状態や発達段階等の共通理解を図って協力体制はできているか。</p>	A
<p>(実際の取組と成果・課題)</p> <p>○各学部主事が教育課程ごとに編成されている課程会を活用し、効果的・効率的な学部運営に努めた。</p> <p>○職員アンケートの2-②では 88.5 %が学部の児童生徒の実態に応じた計画的で適切な学習活動やグループ学習、行事等を学部で取り組んでいると回答。</p> <p>○各学部で学習活動やグループ学習、行事等を実施したことにより、学級を越えた友達同士の関わりが見られるようになった。また、指導の積み重ねにより、児童生徒がコミュニケーション面や自立の面で大きく成長することができた。</p> <p>○各学部の会議において、各学級の児童生徒の健康状態や学習状況などについて情報を共有し合い、指導方法について話し合うことにより、授業内容を工夫したり精選するなどして、各教科や学級の指導に活かした。</p> <p>●各学部でグループ学習や行事等を適切に実施するなどして、指導を継続していく事が重要である。</p>	【自己評価】 B

3 校務部関連	関係者評価
① 校務分掌部等の目標や努力事項を踏まえた実践に努めているか。 ② 児童生徒の実態に応じた計画的で適切な教育活動等を校務部で取り組んでいるか。 ③ 校務部会が必要な事項の検討、確認、共通理解や意見交換の場となるよう努めているか。	A
(実際の取組と成果・課題) ○校務分掌組織は「教育企画部」「学習創造部」「保体安全部」「人財づくり部」「進路支援部」「地域連携部」で役割分担して業務にあたった。職員アンケートの3-①によると、95.4%が校務分掌部等の目標や努力事項を踏まえた実践に努めていると回答した。 ○PTA家庭教育学級と進路支援部との合同企画で「心動かせ！夢実現セミナー」を実施した。各分野で活躍する方々の活動を鑑賞したり一緒に活動したりすることによって、将来のより豊かな社会生活の実現や余暇活動の充実につなげることを目的として、今年度は都城市「オドッドミッド」の皆さんに来ていただき、ダンスパフォーマンスと講演、ワークショップを行った。音楽を楽しんだり、一緒に体を動かしたりする経験の中で、児童生徒や保護者にとって、好きなことを選択しながら心豊かに生活することや余暇活動について考えるきっかけとなった。 ●児童生徒の実態に対応した教育課程を編成することを継続して行っていくことが課題である。 ●各校務部の業務内容や係分担について検討していく必要がある。 ●学校行事等について、それを行う目的や意義を再検討し、実施方法などを再検討していく必要がある。	【自己評価】 B

4 学級関連の教育活動や指導・支援	関係者評価
① 学級の児童生徒の実態に応じた計画的できめの細かい学習指導が実施できているか。 ② 保護者と情報交換や共通理解を図って、連携・協力を努めたか。 ③ 児童生徒の実態に基づいて個別の指導計画及び個別の教育支援計画を作成、共有し、指導に活かしているか。 ④ 児童生徒の人権を尊重した教育活動に努めているか。 ⑤ 児童生徒の実態に応じた教科・領域の授業の計画や実践ができたか。 ⑥ 学習効果を上げるための教材・教具の工夫と活用に取り組んでいるか。 ⑦ 児童生徒の実態に応じて将来を見通した生活面の指導・支援を行っているか。 ⑧ 自立活動は、実態把握を基に、個に応じた適切な指導がなされているか。	A
(実際の取組と成果・課題) ○保護者アンケートの1では95.2%が、子供の指導について学校や学部・学級と家庭との連携はうまくとれていると回答。 ○各学部の教育課程ごとに学習グループを編成し、児童生徒の興味・関心や実態等に応じた合同学習の計画的な実施に努めた。各学習グループで年に2回の校外学習を実施した。行き先は図書館、美術館、科学技術館、空港、イオン、クロスモール、マックスバリュ、動物愛護センターなどである。 ○学級通信を各学級担任が保護者に配付した。児童生徒の学習の様子を、見ただけで分かるように写真を掲載するなどして分かりやすく伝える学級通信の作成に努めた。 ○訪問教育学級は現在、小学部と中学部に在籍者がいる。在宅の訪問教育では家庭へ訪問して授業を行いながらスクーリングを定期的に行い、通学生との合同学習を実施した。せりりゅう祭にも参加して、映像や音声で出演した。児童生徒の健康状態に配慮しながら、保護者に寄り添う姿勢で対応に努めた。また、本年度より、宮崎大学医学部病院と県立宮崎病院に	【自己評価】 B

<p>入院している児童生徒に対して病院内の教室やベッドサイドで授業を行っている。</p> <p>○人権標語やポスターの作成に多くの児童生徒が取り組んだ。また、人権啓発の資料を多くの学級で活用していた。</p> <p>○人権への配慮として、児童生徒への呼名は「さん」をつけるように職員で意思統一している。</p> <p>●職員アンケートの4-①③⑧によると、約20%台の教職員が児童生徒の実態に応じた指導をさらに充実させることができていると感じているようである。学部や校務部の組織や職員研修など、学校全体で取り組んでいくことが重要である。</p> <p>●個別の指導計画・通知表の様式は前年度に比べて簡略化できたが、引き続き使用しながら改善点を検討していきたい。</p> <p>●年間指導計画をしっかりと立てながら、教材・教具等の準備や工夫を進める必要がある。</p>	
---	--

5 保健・安全面	関係者評価
<p>① 児童生徒の健康状況について、保護者やセンター及び保健室との連携を図ったか。</p> <p>② 清潔面、衛生面及び安全面に配慮して日々の指導を行うことができたか。</p> <p>③ 食事や水分補給、トイレ支援等は、安全にできたか。</p> <p>④ 児童生徒の健康状態を把握して、健康管理や状態維持に努めたか。</p> <p>⑤ 医療的ケアは看護師と連携して安全安心に実施されているか。</p> <p>⑥ ヒヤリハット事例について全職員で情報を共有し、再発防止や重大事故の予防に活かしているか。</p> <p>⑦ 施設・設備や教材・教具等の安全点検や安全な活用がなされているか。</p> <p>⑧ 緊急対応等のマニュアルを理解し、緊急時や危機管理に備えているか。</p> <p>⑨ 『防災対策プラン』の整備と充実に取り組んで、活用に努めたか。</p> <p>⑩ 安全面を十分考慮して、学習及び行事の実践がなされているか。</p>	B
<p>(実際の取組と成果・課題)</p> <p>○医療的ケア対象の児童生徒の学級や学習グループでは、学習活動内容・場所の選定や医療的ケアの実施方法等も併せて検討し、保護者やこども療育センターと連携し、安全な実施に努めた。医療的ケア対象で修学旅行を間近に控えている児童生徒については、スクールバスに乘車して校外学習に参加する取組を行った。</p> <p>○感染症に罹患した場合、重症化の危険性が高い児童生徒が多く在籍していることから、学校全体で情報を共有し、迅速な対応に努めた。</p> <p>○インフルエンザ警報が発令された場合や、校内においてインフルエンザ流行の兆しが見られると判断した場合は、集団での学習や校外での学習活動を控えるなどの指導体制の工夫、外来者の制限等の対応を行うこととしており、感染予防及び感染拡大の防止に努めた。</p> <p>○文部科学省の事業で、人工呼吸器の管理を必要とする生徒の保護者待機解除に関する研究に取り組んでおり、今年度で3年目となる。人工呼吸器ガイドラインの作成や緊急対応マニュアルの検証を行い、人工呼吸器を使用する小学部1年生児童の保護者待機を12時から午後1時までを部分的に解除している。研究の成果として、児童の自己理解のきっかけとなり、児童・保護者ともに自立への意識が高まった。</p> <p>●医療的ケア対象児童生徒の医療的ケアについて、教職員と看護師との連携を図る体制をとっているが、看護師の体制や動きについては今後も検討していく必要がある。</p> <p>●実際に地震災害が起こった後の対応などを具体的に考え、実践してみたりする機会が必要である。</p> <p>●「防災対策プラン」は約2年がかりでほぼ完成形になったが、今後はその活用が図られる必要がある。</p>	【自己評価】 B

6 進路指導	関係者評価
<p>① 児童生徒の自己理解・職業理解を図るための計画的な進路学習に取り組んでいるか。</p> <p>② 児童生徒の進路について、保護者や関係機関との連携をとっているか。</p> <p>③ 進路に関する情報収集や提供を行っているか。</p>	A
<p>(実際の取組と成果・課題)</p> <p>○年度初めに全校児童生徒を対象として行った「進路希望と福祉サービスについての調査」をもとに、児童生徒のニーズや将来に向けての希望を把握した上で、「現在の学校生活や学習に関する相談支援」と「将来の生活に向けての進路指導」とが連続したものになるよう、外部機関と連携をとりながら指導と支援を行った。</p> <p>○年2回の進路セミナー、月1回の情報紙発行、ホームページ等により進路指導に関する情報発信を行った。また、高等部2、3年生で行う「進路相談会」と、卒業前に行う「支援担当者会議」では、相談支援事業所や利用する福祉サービス事業所にも参加していただき、本人の実態やニーズを共通理解した上で、社会生活への円滑な移行ができるよう努めた。</p> <p>○卒業後の社会生活に向けて、施設見学を随時行った。また、高等部では、地域の福祉サービス事業所に協力を頂きながら、3年間で合計6回以上の施設見学と現場実習を実施し、実際に見たり体験したりする中で、卒業後の生活に対するイメージを持ち、同時に事業所の方にも、本人の実態やニーズについて理解していただく機会とした。</p> <p>○卒業した先輩やその保護者をお招きして、卒業後の生活や余暇活動について話をしてもらった。仕事で求められる力や、夢を実現するために必要な力をつけるために学校で学ぶべきことは何か、自分の課題は何かについて考える機会とした。</p> <p>●保護者アンケートの4では11.6%が計画的で将来を見通した指導・支援についての努力が必要と回答。児童生徒一人一人の状況や自己理解に基づいた具体的で適切な、将来を見通した進路選択への指導が求められる。</p> <p>●在学中の環境と卒業後の環境が大きく変わることもあるので、様々な環境で過ごすことを想定したり、障がいの状況や年齢の変化などを念頭に置いた指導を検討する必要がある。</p>	【自己評価】 B

7 職員研修	関係者評価
<p>① 児童生徒の実態を踏まえた効果的な指導法等の研究や改善に努めたか</p> <p>② 校内研究において、研究主題に沿ったグループ研究を深化させているか。</p> <p>③ 専門性向上研修等の各種研修を指導や授業実践に活かすことができたか。</p> <p>④ ICT 機器や情報機器を活用した指導に取り組んでいるか。</p> <p>⑤ 自らの専門性を高めるために、教育研修センターや外部の各種研修に参加しているか。</p>	B
<p>(実際の取組と成果・課題)</p> <p>○全職員を対象として、肢体不自由教育に関する基礎的・基本的内容の基本研修を4月から6月にかけて実施した。研修内容は、「子どもへのかかわり方」と題して身体の動かし方の基本や摂食指導等、「本校の授業の実際」と題して自立活動の具体的な実践についての研修を行った。</p> <p>○校内研究においては、研究主題を「児童生徒の主体的な学びを支える指導実践の在り方」として、授業力の向上を図った。職員を13班に編成し、各班で理論研究や授業研究を実施した。</p> <p>○情報モラル研修を2回と、ICT教育研修会を4回実施した。情報モラル研修会は、情報機器を使用する際に、トラブルにまきこまれないための基本的な知識や実際に起こったトラブルの事例紹介や演習等を行った。ICT教育研修会はタブレット端末(主にiPad)を授業で使用する</p>	【自己評価】 B

るための基本や応用的な活用方法等を中心に、学習に役立つアプリケーションの紹介や周辺機器の使い方、実践事例について研修した。また、夏季休業中には児童生徒の学習に活用できるスイッチや周辺機器の製作研修会を2回実施した。

○肢体不自由や障がいの重い子どもの指導について、以下のとおり専門性の高い講師を招聘し、指導助言をいただき、研修に役立てた。

- ① 宮崎県立こども療育センター 作業療法士 日高直樹氏
「作業療法についてとアンケートからのQ&A」
- ② 福岡市立今津特別支援学校 教諭 福島勇氏
「肢体不自由児へのコミュニケーション支援について～ICT、ATの活用を中心に～」
- ③ (株)沖ワークウェル シニアアドバイザー 津田 貴氏
「つながる・働く～肢体不自由教育の今後～」
(宮崎県特別支援教育研究連合肢体不自由教育研究部会研究大会)
- ④ 長崎県立諫早特別支援学校 主幹教諭 宮尾尚樹氏
「新学習指導要領の趣旨を踏まえた自立活動の指導
～説明責任を果たすことのできる指導実践のために～」

●職員アンケートの7-④によると、34.5%がICT機器や情報機器を活用した指導を充実させていくことが必要だと感じているようである。

●保護者アンケートの5では9.7%が教師の専門性について努力が必要と回答。校内研修において引き続き、実施内容や時期などを検討して、さらなる専門性を目指す必要がある。また、専門性向上のために、外部講師を招聘する研修を実施していきたい。

8 交流及び共同学習	関係者評価
① 学校間交流は、相手校との共通理解の下、効果的に実施できているか。 ② 居住地校交流は、保護者及び相手校との共通理解の下、効果的に実施できているか。	B
(実際の取組と成果・課題) ○小学部は清武小学校とボウリングやボール活動、絵画制作、歌や楽器演奏などの音楽発表会を通して交流及び共同学習を行った。多くの友達と関わることのできる体験になった。 ○中学部は清武中学校と宮崎工業高校とハンドサッカーを通じて交流及び共同学習を行った。頑張っている姿や工夫次第でできるようになることを伝えることができ、障がい者理解につながった。 ○高等部は宮崎第一高校の生徒会役員と茶道部の生徒と共にお茶会を開いた。宮崎第一高校生は自然な接し方や適切な関わり方を工夫する姿が見られた。同じ席でお茶を楽しんだことで多様性の理解につながった。 ○居住地校交流は、小学部において16名の児童が居住地の小学校13校と、中学部において4名の生徒が居住地の中学校4校と実施した。相手校の受け入れも良く、児童生徒同士の温かい関わりの様子が見られた。 ●交流を実施するためには、相手校と緊密な連絡調整が必要である。相手校の行事や授業時間などを調整しながらより充実した交流を図っていきたい。 ●次年度、学校間交流に対する県の予算がなくなるため、実施方法等を検討する必要がある。	【自己評価】 B

9 関係機関との連携	関係者評価
① こども療育センターと連携した指導・支援に努めたか。 ② 福祉サービス事業所等との連携に努めたか。 ③ 学校ホームページの更新や活用に努めたか。 ④ 関係機関（教育、福祉、医療、行政等）との連携はとれているか。	B
(実際の取組と成果・課題) ○こども療育センターと毎月の連絡会を開き、情報の共有ができ、お互い改善すべき点などについて話し合うことができている、有意義である。 ○各学級や学習グループにおいて、行事や活動の様子を、各学部のホームページに随時掲載するように努めた。 ○感染症への対応について保護者の御理解と御協力をいただきながら、こども療育センターや事業所、スクールバスとも情報交換や連携を図った。 ○校内の児童生徒の支援のために、特別支援コーディネーターが中心となって学校生活や学習に関する相談を受け付けている。必要に応じて、他の教育機関や医療、福祉の関係機関につなぎ、連携してサポートを行った。 ●登下校における送迎や、放課後・休日の過ごし方、卒業後の生活、災害時の連携・協力などについて、福祉事業所、福祉施設とさらなる連携を深めていく必要がある。 ●職員アンケートの9-③によると、42.5%が学校ホームページの更新や活用に努める必要があると回答している。	【自己評価】 C

【学校関係者評価委員からの具体的意見】

<p>○教職員含めた学校関係者全員で感染症対策の知識を深める機会があっても良いのかなと考えました。また、災害等の非常時に保護者を含めて個々がどう動く必要があるのかあいまいな点があると、保護者との意見交換ではあがりませんでした。</p> <p>○児童の急変対応や大規模災害時の対応については今後、協働して取組を行う必要があると思います。教員と保護者、医療者が児童こどもを中心とした「わ」をつくってあげたいと思います。</p> <p>○全体的に学校（職員一同）の取組については評価は高いと思います。守秘義務や保護者の方々の意見などで、伝えたい事がうまく伝わらない等、難しいことが多いと思いますが、もっと関係機関や SNS 等を利用して多くの情報を発信して頂きたいと思います。</p> <p>○感染症対策や防災対策はしっかり対応してくださっている。ただ、マスクを正しく着用すること、手指の洗浄や消毒などを実践すると良い。感染症対策は徹底しているが、蔓延したときの対応・対策を考えてほしい。</p> <p>○こども療育センターとの情報共有や連絡、連携はよくとれている。また、医療的ケアの子供とそれ以外の子供に対しても、学校からの情報は連絡帳などを通して、家庭へよく伝わっている。学校に送迎している保護者に比べると、スクールバスや事業所を使う家庭は、学校の情報が伝わっていないかもしれない。インフルエンザの感染情報などを含め、全家庭へ均等に情報が伝わるといい。</p> <p>○引き渡し訓練は実施している。また、備蓄や常備薬も備えてある。しかし、いざ何かが起きたときの対応を検討してほしい。</p> <p>○将来、社会に出た時に、地域で知ってもらうためにも、学校の中で様々な情報を家庭に還元して、各地区で命を守る行動ができるように、学校教育を継続してほしい。</p> <p>○居住地校交流は満足いく取組を実施している。しかし、そうではない部分が出てきたときのために、話し合いができるようにしてほしい。</p> <p>○保護者アンケートで「4 計画的で将来を見通した指導・支援がなされていますか」に対して、11.6%の保護者が努力が必要であると回答している。学校にて進路セミナーに参加したり、担任と連絡を取り合っている保護者はいいが、学校に来られない保護者とも密な連絡を取り、子ども達の様子をどう伝えていけば良いのか検討してほしい。</p>
--